

きょうの 挑戦者 たち

Vol.37

内藤朋博さん

1978年、内藤工務店5代目として京都に生まれる。高校卒業と同時にプロサーファーを目指すが挫折。父の仕事を手伝ううち大工としてのプロ意識に目覚め、親方のもとで4年間修業。28歳のとき父が他界して店を継ぐ。その後宮大工と出会い、伝統技術に魅了される。36歳で受けたコーチングをきっかけに、京町家を保全する会社として改めて(株)祇園内藤工務店を設立。さらに2020年12月、町家を建設できる職人の育成を目指し、NPO法人祇匠会を設立。

造る人と住む人の
双方がいてこそ、
京町家を未来に
遺すことができます。

時代に合った美しい日本の宝「京町家」を創造し、
次世代につなぐ



写真上／「京町家」の定義は、石の基礎の上に木材で木組み・骨組みをし、土で壁を塗り、屋根や瓦で葺いた木造建築だ。「昔の町家には、頼りない竹や木材を使っているのに、100年もつ強度がある。当時の大工の技術には驚きます」。
写真下／祇匠会では熟練のプロが、若い職人たちを指導する。「道具の手入れが一番大事。木材に入れるとキュッという感触がして刃先の鋭さがわかる。国産の無垢材を見る目も養わないといけない。大工が学ぶべきことは多いのです」。

京都の景観に欠かせない京町家は、この五十年で激減した。伝統技術を伝え、時代に合った京町家づくりに取り組むのが祇匠会代表の内藤朋博さんだ。

「京町家は職人の技術の結晶です。大工、左官、瓦、建具。さまざまな職人の技術が継承されないと修理ができません。それぞれの技術を習得した職人を育成する必要があるんです」と語る内藤さんは、祇園の大工を継いだ五代目。若い頃、塗装の棟梁の筆さばきに感動して大工になろうと決意した。

宮大工をはじめ凄腕の職人たちとの出会いを経て、「彼らを講師に、町家を一から造れる職人を育てよう」と2020年、NPO法人祇匠会を立ち上げた。そのきっかけの一つが、頻発する災害のニュースだ。「もし京都に地震が起きたら、倒壊した京町家を直せる人材はいるのか」とい

う危機意識が内藤さんの背中を押した。

内藤さんは「京町家は日本の宝です」と言い切る。観光資源や景観の意味だけではない。

「京町家の素材は木材、竹、土。すべて日本の国産、天然のもので。京町家の活性化によって、林業に活気が出るという点も。建築材は輸入木材が8割を占めるが、昨今の円安で国産木材の需要が増えた今がチャンスと目を輝かせる。活動を始めて2年目。内藤さんが大切にしているのは職人の成長だ。彼らの技術が最も伸びるのは修繕よりもゼロからの建築と気づいた内藤さん、

「次の目標は、時代に合わせた町家の新築です。住みやすい町家なら、住む人が増えますし、京都の美観も継承できます」。

美しい京町家を次世代につなぐために。内藤さんは挑み続ける。

私も挑戦者です

時代に合った美しい日本の宝「京町家」を創造し、次世代につなぐことに挑戦する祇匠会の内藤さんと同様に、三洋化成も化学のちからで化学の枠を越えてイノベーションを起こし、持続可能な社会づくりに貢献しています。

三洋化成工業株式会社

●京都市東山区一橋野本町11-1
もよりバス停は「泉涌寺道」

三洋化成 Twitter
@sanyochemical

